

ネイチャーセンター ガイド (106)

「いきもの」たちの距離感

先日、大学時代お世話になった森の下草刈りに出かけた。いろいろとお世話になったこともあり、そんな思いと、これまでの経験を生かした「森づくり」をしてみたかったから。

当時、2年生。大学のゼミでムササビの為に巣箱をつくり山へ掛けた。翌年の春、その巣穴から顔を出しているいきものをムササビとは分からなかった。このことをゼミの先生に報告したら「夕方、山に行ってください」と言われ森へ入った。巣箱から出たムササビは、枝をつたい、目の前を滑空した。開いた口がふさがらないとはこのことだった。その後、卒業論文もこの出会ったムササビ観察を研究テーマに書いてみた。

今、振り返れば、「夕方、山へ行ってごらん」と言われたことが、いきものたちの距離感を知る機会だったのかもしれない。こうしてこの職業を選んだことも、この職業を続けられることも、この何気ない単純なかつ重さある言葉のおかげなのかもしれない。

この大学の山から離れて10年。当時、メインに観察していた巣箱、そして巣箱を掛けていたアカマツの巨木は倒木として土に返ろうとしていた。全く枝打ちをしないヒノキたちは、枝を日差しのある方へある方へ伸ばし、大きくなっている。そして、また、新たな命が誕生していることも見逃せず、森が姿を変えていく光景を

見せつけられ、改めて自分の森に対する意識が変化していることにも気づかされた。

この枝を残し、この枝は切る。この木の葉はムササビが好物だから、10年後に期待。ヒノキの枝は枝打ちするので、いずれこの場に日差しがくる。そうすれば、このケヤキが育つ、ケヤキを育ててれば100年後に洞ができ、ムササビの家になる。なんて妄想をしながら、ブツブツとひとり話しながら森と戦った。

そんな戦いにほっと一息。コゲラというキツツキの仲間が、フジツルによって撒きつかれ、枯死木となっていた幹にむかってくちばしを向けているのではないか。

その姿を見て思った。森は生きている、いきものに生かされる木もある、木を土に還すために虫がつく、その虫をキツツキが食べる。その木を倒さず、残していこうと手を何度も止め、その木を見上げた。私が作業をすればコゲラはやってくる、しかし手を止め見続ければコゲラは去っていく、おもしろい距離感だった。森、コゲラとの距離感を教わった。

そして最後に、コゲラは立っている枯死木でないと木をつつかないのだろうか？と疑問に思い、山を去った。

連絡・問合せ先 ☎(45)6222

宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター
開館時間：午前9時から午後4時まで
休館日：月曜日、祝祭日の翌日

防災ミニ情報

災害時の相互援助に 関する協定について

地震、風水害などの大規模災害が発生した時に、応急・復旧活動を都留市単独の行政だけで対応することは非常に困難となります。このため、大災害が発生した場合、当市のみでは十分な応急措置が実施できない場合に備え、他の自治体と相互に援助し合い、連携して支援体制を構築し、自治体相互間の協力により応急対策及び復旧対策などの円滑化を図り、被災自治体の支援に万全を期することを目的として、災害時における相互援助に関する協定を締結しています。

市が災害時相互援助協定を締結している県内の自治体は、甲府、富士吉田、大月、甲州、山梨、韮崎の各市であり、新たに合併した市との相互援助協定は今年度中に締結する予定です。また、県外自治体では、板橋区のほか12市町村と相互援助協定を締結しています。相互援助の具体的な内容としては、食糧・生活必需品・資機材の提供、救済・救助に必要な車両の提供、救出・医療・防疫・施設の資機材及び物資の提供、被災者を収容する施設の提供、救助・復旧に必要な職員の派遣などがあり、支援自治体は、被災自治体への支援が必要であると認められるときは、災害発生後直ちに支援体制を整え、援助するよう努めることとなっています。